

序論

一般的に本書のような報告書は、ある問題に焦点をあてるため、
まず初めに統計を提示する。

ところが、今回、この「世界子供白書2013」が取り上げている少年少女たちは
問題そのものではない。

それどころか、一人ひとりが妹や弟、あるいは友人で
あり、それぞれに好みの料理や歌、ゲームがある。夢を
持ち、その夢を実現したいと思っている娘や息子の場合
もあろう。彼らは、ほかのすべての少年少女たちと同じ
ように権利を持つ、障がいのある子どもたちである。

障がいのある子どもたちは、ほかの子どもたちと同じ
ように、活躍の機会を提供されれば、充実した生活を送
り、地域の社会、文化および経済の活力増進に貢献する
可能性を持っている。本書に掲載されている個人のエッ
セイはそれを証明している。

ところが、障がいのある子どもたちにとっては、生存
し、健康に成長すること自体が難しい場合がある。障が
いのある子どもたちは、障がいのない子どもたちに比べ、
貧困に陥る可能性が高い。子どもたちが同じような環境、
例えば同じように貧困下にあたり、マイノリティ集団
の一員であったとしても、障がいのある子どもたちは、
障がいに起因する課題をさらに背負い込み、社会の中で
さまざまな障壁にぶつかる。貧困状態にある子どもたち
は、教育やヘルスケアなどの恩恵を最も受けにくい、
貧困下にあり、かつ障がいがある子どもの場合は、地元
の学校へ通ったり、診療所を利用する機会がさらに少な
くなる。

多くの国では、障がいのある子どもたちは施設に入れ
られるか、放置または育児放棄されることが多い。こう
した対応自体が問題であり、それは障がいのある子ども

たちは何もできず、人に依存し、ほかの子どもたちとは
異なるという否定的、あるいは逆に温情的な思い込みに
根ざしており、真の理解がないことに根ざしている。こ
うした思い込みを改めないかぎり、障がいのある子ども
たちの権利は今後もないがしろにされ、差別、暴力、虐
待を経験し、機会を制限され、社会から排斥され続ける
であろう。

必要なのは、子どもたちの権利と彼らの未来に対して、
コミットメント（約束を果たす責任と意気込み）を持ち
続けること。それも最も困難な立場にある人たちを優先
しながらそうすべきである。これは公平性の面からも、
すべての人たちのためにも必要なことなのである。

社会的排斥からインクルージョン (誰もが受け入れられる社会)へ

障がいのある子どもたちは、障がいの種類、住んでい
る場所、帰属する文化や階層に応じてさまざまな形態の
排斥に直面し、それによって受ける影響の程度も異なる。

ジェンダーも極めて重要な要因となる。女子は男子よ
りもケアや食料を受けにくく、家族の対話や活動から排
除されやすい傾向がある。障がいのある女子や若い女性
は「二重の障がい」を背負わされている。彼女たちは、
障がい者の多くが遭遇する偏見や不平等だけでなく、伝
統的なジェンダーの役割や障壁による制約も受けるので
ある¹。障がいのある女子は障がいのある男子や障がい

のない女子に比べ、教育や職業訓練を受ける機会が少なく、就職先を見つげられる可能性も低い²。

しかし、こうしたさまざまな形態、さまざまな程度の排斥の根底には、子どもたちが、持っているものではなく、欠けているもので規定され、判断されているという共通項がある。障がいのある子どもたちは「できない」と見なされることが多く、それがために脆弱性が高い。障がいを理由にした差別は資源や意思決定からの排斥という形で現れ、ひどい場合には殺害に至る場合もある³。

排斥は、彼らが見えてこない存在だということに起因することが多い。信頼できるデータを持っている国がほとんどないからである。国民の中に障がいのある子どもが何人いるのか、どのような障がいを負っているのか、障がいが生活にどのような影響を与えているのかについて、信頼できる情報を収集していないのである。国によっては、障がいのある子どもを育てている家庭がほかの村人たちに除け者にされることがある。そのため、愛情深い父母や家族であっても、コミュニティから排斥されるのを避けるため、あるいは子どもを守ろうと必死になっ

ているため、あるいはその両方の理由で、自分の子どもに障がいがあることをどこにも報告しない場合がある。子どもに障がいがある場合、出生登録さえしないことがある。こうして排除された子どもたちはその存在が認識されず、結果的に本来受けることができる医療、教育、社会サービスから排除されてしまうのである。

子ども時代に必要なサービスを受けられない場合、後々の人生において有利な職に就けなかったり、市民活動への参加ができなかったりと、長期にわたってその影響が続く可能性がある。逆に、支援サービスや支援技術を利用できれば、障がいのある子どもたちは地域社会で自らの居場所を見つけ、貢献することができるようになる。

実際のところ、将来の見通しはそれほど暗くはない。障がいのある子どもも障がいのない子どもも平等に権利を享受できる、インクルーシブな社会（誰もが受け入れられる社会）を構築する効果的な手段はすでに存在する。物理面、人々の受け止め方や態度、政治面での障壁も壊されつつある。ただし、その進行状況は一様ではなく、道のりも遠いと言わなければならないが。



地雷の爆発で片足を失った14歳のラーメイトラは、アフガニスタン、カンダハールにある戦争被害に遭った子どもたちのためのセンターで電気技師になるための訓練ワークショップに参加した。 © UNICEF/AFGA2007-00420/Noorani

「子どもの権利条約」と「障害者の権利に関する条約」に基づき、世界中の政府が、障がいの有無に関わらず、すべての子どもが、いかなる差別も受けずに権利を享受できるよう、国としての責任を果たすことを誓った。2013年2月現在、「子どもの権利条約」の締約国は193カ国であり、「障害者の権利に関する条約」は127カ国と欧州連合（EU）が締結している。

この2つの条約は、障がいのある子どもたちの地域社会へのインクルージョンに、世界全体が真摯に取り組んでいることを示している。インクルージョンへの関心は、すべての子どもは社会の完全な構成員であるという認識に立っている。子どもは、誰しも、尊重される権利、意見を求められる権利を持ち、伸ばすべきスキルを持っており、満たさなければならないニーズを持ち、尊重されるべき、そして奨励されるべき、かけがえのない個人なのである。インクルージョンとは、すべての人が利用できるよう、物理的なインフラストラクチャー、情報およびコミュニケーション手段を整備することであり、誰もが差別に苦しむことがないよう、差別を撤廃し、障がいのある子どもたちも、ほかの子どもたちと同様、権利を享受できるよう、保護、支援およびサービスを提供することを言う。

インクルージョンは単に「統合」を意味するわけではない。「統合」は、障がいのある子どもたちを、すでに存在する規範や基準といった枠組みに入れることを意味する。例えば、教育面で見た場合、障がいのある子どもたちを「普通」校に入学させるという形である。これだけではインクルージョンにはならない。インクルージョンは、すべての子どもたちが質の高い学習とレクリエーションを一緒に楽しめるよう、学校を設計および運営するとき初めて実現する。そのためには、障がいのある子どもが点字、手話、ニーズに合ったカリキュラムを利用できるようにする必要がある。

インクルージョンはすべての人に恩恵をもたらすものである。再び教育を例に挙げると、スロープのある幅広い出入り口は車椅子の利用者に限らず、子どもたち、教師、父母、学校の訪問者全員にとって使いやすく、安全性を高めてくれるものとなる。また、子どもを中心に据え、社会の真の多様性を反映および勘案するために障が

統計について

幅広く利用されているある推定によると、9,300万人近くの子どもたちが何らかの種類の、中程度または重度の障がいを負っている。これは14歳以下の年齢の子ども20人に1人に相当する。

このような世界的データの推定値は基本的に推計である。例えば、上述の推定値は2004年以降使用され続けており、最新の数値ではない。このように、統計の質は多様であり、手法も一貫していないため、信頼性に欠ける。取り上げる問題の背景状況を示して説明するため、本書は全国調査や独自調査の結果を紹介しているが、これらも慎重に解釈すべきものであり、相互を比較するのは妥当ではない。その理由は障がいの定義が場所と時によって異なり、調査の設計、方法および分析も異なるためである。これらの問題と、データの質と可用性の改善を目的とする有望なイニシアティブについては本書の第6章で説明する。

い者の主張を盛り込んだインクルーシブなカリキュラムは、障がいのせいで夢や選択肢が制限されたかもしれない障がいのある子どもの世界を広げるだけでなく、障がいのない子どもたちも、多様性と誰もが受け入れられる社会の構築に必要なスキルと心構えを正しく理解することにより、その視野を広げることができる。学業面での達成が職業やそのほかの生計を立てる手段につながる中、障がいのある子どもはさらに前進し、おとなの社会の完全かつ平等な構成員として、また消費するだけでなく、生産者としての位置づけを確保することができるのである。

行動のための枠組み

障がいのある子どもたちをチャリティー（慈善）の対象と見なしたり、対応したりしてはならない。障がいのある子ども、障がいのない子どもたちと同様、権利を持っているのである。例えば、生きる権利、適切な保健ケア、栄養、教育で可能になるさまざまな機会を得る権利、意見を表明し、意思決定に参加する権利、法に基づき平等な保護を受ける権利を持っている。障がいのある子ども

（9ページに続く）

先駆者からインクルージョンの提唱者へ

筆者：ナンシー・マグワイア



ナンシー・マグワイアは英国出身。障がい者のための活動家である。彼女は有資格のソーシャル・ワーカーだが、海外を旅行した末に障がい者、特に若い女性の障がい者の権利のため、活動を開始した。アジアやアフリカ南部の障がい者団体を活動して来たが、政策および開発分野の博士号取得を希望している。

私は1986年、ロンドンに生まれ、骨形成不全症という骨がもろくなる病気を患っている。骨形成不全症を患う子どもの多くは、絶対にケガをしないよう、保護されて育つ。中には、過保護すぎると言う人もいる。私の両親は私が安全に過ごすことを望んだが、同時に遊んだり友だちを作ったりする機会を持ち、可能なかぎり普通の幼児期を過ごしてほしいと考えてくれた。

1980年代、インクルーシブな教育はまだ極めて新しい考え方であった。障がいのある子どもの親の大半がそうであったように、私の両親も

また私を特別支援学校に入れるよう助言された。私の母は教師だが、推奨された学校を訪問し、そこでは標準以下の教育しか受けられないことを確信した。両親はいつも障がいのない姉のケイティを基準にして、私にとって許容可能かどうかを判断していた。ケイティにとって十分ではないと思うことは、私にとっても十分ではなかったのだ。

私の通う小学校で、私は初めての障がい児であり、私はさまざまな点でインクルージョンの実験台になっていると感じていた。例えば、教師は私を学校生活のあらゆる側面で受け入れるべく積極的な姿勢で臨んでくれたが、どうすれば私が有意義な形で体育の授業に臨めるようにできるか、それを考え出せるほど経験は積んでいなかった。

幼少期のほとんどがそうであるように、私の幼少期も常に順調というわけではなかった。私は病院で多くの時間を過ごしていたため、「インクルーシブ」な形のメインストリーム教育^{*}の中にあっても排斥されているときがあった。例えば、教師は私が骨折することを恐れ、私が幼稚園のクリスマス・パーティーに参加することを認めなかった。

また高校では食堂に障がい者用に

別のテーブルが用意されていたが、私とそのテーブルに着くことを拒否する理由を教師には理解してもらえなかった。しかし、挫折や障壁はあったものの、教育面でも社会面でも私は生き生きと活動できるようになった。

私は常に新しいことに挑戦するよう促されていた。課外活動では水泳、バレエ、車椅子テニス、演劇や音楽などに挑戦した。そうした活動の多くで、私は障がいのあるたったひとりの生徒であった。興味深いことに、学校に比べ、これらのグループでの活動のほうがインクルーシブだと、私は感じた。それは、私がどの程度参加でき、どの程度貢献できたかという点でそう思えたのである。私は必要とされていると感じ、ほかの生徒は私をうまく巻き込む方法を編み出してくれたからである。それでも、動きに制約があるため、難しいと思うことも数多くあった。ほかの生徒たちのようにうまくできないため、苛立ちを感じたときもあった。また成長して自意識が強まると、自分の問題を人前にさらけ出す状況に身を置くことに尻込みするようになった。

10代になると、友人の多くはわざと注意を引くような派手な服装をしたり、悪態をついたりした。友人が自身を目立たせ、違いを際立たせるためにできることは何でもしよう

^{*}障がいのある子どもたちを、障がいのない子どもたちと同じように、「主流（メインストリーム）」となる教育制度に汲み入れ、同じ環境下で社会生活を送れるようにする教育方法。

政治やメディアなど、生活のさまざまな場面で障がいのある人々が注目される機会が増えている。これは障がいのある子どもたちに、何を達成することができるかを深く理解させる上で有益である。

としているときに、私は必死に「普通」であろうとし、周囲に溶け込もうとしていた。障がいのある子どもとして成長する中で、私はしばしば注目を浴びた。通りで出会う人々は私をじろじろ見て言葉をかけ、「この子はどこが悪いのか」と両親に尋ねることがよくあった。そうしたことを適当にあしらうことができる日もあったが、いかに強くても、どれほど家族の支援があっても、傷つかずに済むことはなかった。

私は極めて自尊心が低く、自分の体に自信を持てなかったが、極端に太り過ぎていたためさらに自信を失っていた。体操は難しいことがわかり、同年齢の女子の多くと同様、食べることによって自分自身を慰めた。また、私自身を表すために使われる医学用語を習得した。そのひとつが「変形」という言葉だ（私の脊柱が湾曲していたが、その後改善した）。14歳の時、摂食障がいを患った。その理由のひとつは体重を減らしたかったためだが、体重は私が実際にコントロールできる外見のひとつの側面であるような気がしたためでもある。

私には惜しみない支援を提供してくれる家族や友人がいたが、障がいがあるということをプラスだと思ったことは一度もなかった。逆境のように克服しなければならないものだと考えていた。可能なかぎり「非障がい者」であろうとすることで頭が

いっぱい、歩くことができれば私の生活は格段に向上すると思いついた。現在はもう車椅子を使用していないが、逆に、さまざまな点でかつてないほど自分の障がいを思い知らされるようになった。相変わらず人は私の身長が低いために何かを言い、私の生活や能力について憶測する。私は常に自分の能力を証明しなければならない状態にある。特に職場ではそうだ。障がいが私を定義するわけではないが、私が何者で、何を達成したかを具体的に示す上で障がいは不可欠であった。今では障がいがあるという事実を前向きに受け入れている。もはやそれを否定的で、恥ずべきこととは考えていない。障がい者であることは多くの点で私に有利に作用し、障がいがなければ得られなかったであろう機会をもたらししてくれた。この記事を執筆していることもそのひとつだ。

子どもの経験は一人ひとり異なる。私は英国の下位中流階級出身で、無料のヘルスケアと質の高い教育を受ける機会が与えられた。しかし私は、帰属意識、自尊心、強い願望といったことは、性別、階級、国籍といった違いを超越するものだと強く確信している。自尊心を高めるには、障がいのある子どもたちは生活のあらゆる局面で参加し、貢献する機会を持つ必要がある。

政治やメディアなど、生活のさま

ざまな場面で障がいのある人々が注目される機会が増えている。これは障がいのある子どもたちに、何を達成することができるかを深く理解させる上で有益である。成長期の私にとってのロール・モデルはスティービー・ワンダーしかいなかった。私が彼を高く評価したのは、彼が視覚障がい者であるにもかかわらず成功を収め、尊敬されるミュージシャンであったからだ。しかし、障がいのある人々が教師や医師、店員といった普通の職業に就いているのを見ることができたならば、私もかなり心強かったと思う。また、私の両親の支えにもなったと思う。母は、私が子どもの頃、考えると恐ろしくなるので私の将来について考えないようにしていたと言っていた。母は私に能力があることは分かっていたが、選択肢が限られることを懸念していたのである。

結局のところ、私が重要なことを実現する上で障がいが妨げとなったことは一切なかった。私は有資格のソーシャル・ワーカーであり、16歳のときに運転免許証取得の試験に合格し、19歳のときに自宅を離れ自立、アジアとアフリカで暮らして仕事をした。障がいのある子どもたちの奪うことのできない人権と潜在能力を強く信じている私は、将来、国際的な舞台上で障がいのある子どもたちのためのアドボケート（代弁者・政策提言者）になりたいと考えている。

先天性白皮症、差別、迷信とともに生きる

筆者：マイケル・ホセア



マイケル・ホセアは1995年生まれ。6人きょうだいの長男で、家族には先天性白皮症のきょうだい、彼を含め3人いる。タンザニアのドドマに住み、まもなく学校を卒業する予定である。彼は、Leonard Cheshire Disability Young Voicesというネットワークを通じて、特に先天性白皮症などの障がいがある若者たちの権利をアドボケート（政策提言）している。

私はタンザニア第2の都市、ムワンザで生まれた。私は長男で、首都ドドマできょうだいや両親と一緒に暮らしている。私は6人きょうだいで、妹のひとりと弟のひとりも先天性白皮症である。

先天性疾患が原因で生じる障がいのために私の生活にはさまざまな困難が伴う。日光は常にトラブルの原因となるため、長袖の厚手の服、そして目を保護するためのサングラスを着用しなければならない。学校でも問題に直面する。黒板が見えないときがあり、必ず日陰に座らなければならない。この国にはめがねや拡

大鏡、特別なコンピューター装置といった視力を補強してくれる技術が十分に発達していないため、それらを利用できない先天性白皮症の子どもたちは、学校を卒業するのが難しく、就職先を見つけるのにも苦勞する。私の家庭は貧しいので、学費を稼ぐことも難しい。

私たちに対する人々の対応が、私たちの生活をより一層難しくしている。先天性白皮症の人はさまざまな差別を受け、友だちの仲間に入れてもらえないときがある。先天性白皮症について、極めて邪悪な、誤った通説を信じている人もいる。それは

教育こそが、殺人、虐待および差別をやめさせる鍵である。

拡大家族も含め、人々が先天性白皮症の人も同じ人間だということを学ぶことが重要である。

先天性白皮症の人は人間ではなく、決して死なず、先天性白皮症は神の呪いであり、私たちに触った人はみな、呪いを受けるというものだ。

最悪なのは魔術師が先天性白皮症の人をとらえて殺害し、毛髪や身体の一部、臓器をお守りや薬に使うことだ。先天性白皮症の人の身体の一部を呪術医に持参すると金持ちになって繁栄すると一部の人々の間で何世紀にもわたって信じられてきた。先天性白皮症の人を殺害することは違法であるが、今でもこうした事件が発生している。人間の強欲さが人々をこうした行為に走らせている。しかし、これらはすべて嘘である。これらの残虐行為を実際に行った人がいるが、彼らは金持ちにもならず、繁栄することもなく、生活は変わっていない。

数ヶ月前、私ときょうだいは、父の友人が危険を知らせてくれたおかげで魔術のために殺されないで済んだ。その人は父のもとを訪れ、先天性白皮症の3人の子どもたちが捕らえられるかもしれないと言いに来てくれ、ムワンザを離れるよう忠告してくれたのである。我が家は貧しいため、ムワンザを離れることは簡単ではなかったが、すべての持ち物を持ち出し、その日の午前3時にムワンザを離れた。

私たちはドドマまで500キロメートル以上も移動し、2日後に報告を受けた。留守宅に人が押し入り、私たちを殺そうと見て回っていた、と。

男たちは私たちが逃げたことを知ると、隣人宅に押しかけたと言う。その隣人は、地元の先天性白皮症の人たちの代表で、私たちの支援に力を尽くし、先天性白皮症の人たちの権利をアドボケートしてくれていた人である。男たちはその隣人の性器と両腕を切り取った後、隣人をそのまま死ぬに任せ、去ったと言う。この状況は、別の隣人から電話で知らされた。この知らせに私はひどく心を痛め、涙が止まらなかった。だが、私に何ができたであろうか。これが現状なのだ。

なぜ人々は仲間の人間にこのようなことをするのか、私には理解できない。しかし私は、教育こそが殺人、虐待および差別をやめさせる鍵であると考えている。拡大家族以外の人も含め、人々が先天性白皮症の人も同じ人間だということを学ぶことが重要である。私たちはみな、同じなのだ。

日常の困難から逃げるため、私は詩を書いたり、歌ったりすることがとても好きだ。ちょうど先天性白皮症と私たちの葛藤の歌を書き終えたばかりだ。いつか私が作った歌をス

タジオで録音し、メッセージを広めることができる日が来ることを夢見ている。いつの日か世界中の人々が先天性白皮症の人も自分たちと全く同じであることを理解してくれることを願っている。私たちはみな、人間であり、愛情と敬意を持って扱われるべきなのである。

注：

先天性白皮症は非常に稀な遺伝性疾患で、すべての民族に発現する。先天性白皮症患者はメラニン色素の欠乏により目、体毛、皮膚の色素沈着がほとんど、または全くない。日光に敏感で、太陽光にさらされると皮膚がんを発症するリスクが比較的高い。先天性白皮症の人の大半は視覚的な障がいもある。カナダの非政府組織セイム・サン（Under The Same Sun）は、タンザニアの人口2,000人にひとりが先天性白皮症であると推定している。医学的疾患自体は平均寿命に影響しないが、タンザニアにおいて先天性白皮症がある人の平均寿命はおよそ30歳である。

良い思い出が欲しい

筆者：ニコラエ・ボライコ



ニコラエ・ボライコと弟のグリーシャは、モルドバの知的障がい児の施設で数年間を過ごした。ニコラエは中程度の知的障がい、弟は重度の知的障がいがあると診断されている。2010年にニコラエとグリーシャはラプスナ村で母親と再会した。この再会は、Open Society Mental Health Initiativeとソロス財団モルドバの資金援助を受け、Keystone Human Services International Moldova Associationが実施する「すべての人にコミュニティを一モルドバ」プログラムの支援により実現した。

僕が弟のグリーシャと一緒に施設に入ったのは11歳の時だ。現在、僕は16歳。母が僕たちを施設に送ったのは、家を買ったり借りたりするためのお金がなく、夜働かなければならなかったためだ。母はたびたび僕たちに会いに来てくれた。

僕は施設に入った日のことを覚えていない。そこにいた時のこと思い出せないものさえある。ほかの思い出もそのうち忘れたと思っている。僕は新しい思い出、楽しい思い出

出を作りたいと思っているのだ。

休日の食事は良かった。そのほかの日にもおいしい食事が出されるときがあった。食事は1日4回で、食後は僕がキッチンの掃除をした。

先生は詩の朗読や歌を教えてくれ、さまざまなゲームを紹介してくれた。僕はゲゲルの詩と母親についての詩を2つ知っている。

1時から4時までは昼寝の時間だったが、僕は眠らなかった。ほかの男の子たちと笑ったり、話したりしていた。僕は枕に頭を乗せていたが、目を開いたままほかの男の子たちを見ていた。クラスの男の子16人全員がひとつの部屋で暮らしていた。

ビクターという男の子がいた。彼はキッチンで働いていた。僕たちは近くのスタジアムに行った。ビクターは僕だけをスタジアムに連れて行ってくれた。彼はパンと乳酸飲料を持ってきていて、一緒に食べた。母が僕と弟を連れ戻しに来たとき、ビクターは睡眠中だったために気づかなかった。彼は自分のことを忘れないようにと、写真をくれたが、僕はそれを施設に置き忘れてしまった。

職員はときどき僕たちを叩いた。理由はわからない。僕はいろいろな棒で激しく叩かれたため、背中をケ

ガした。僕だけじゃない。ほかにもケガをした男の子がいた。ナイフを持っている子もいた。ほかの子を襲う子もいて、僕はときどき握り拳で闘った。自分の身を守るにはその方法しかなかった。そうでなかったら、殺されかねない。彼らはグリーシャのことも殴ったが、グリーシャのことは僕が守った。

僕は施設にはいたくなかった。母が僕たちを迎えにきてくれていなかったら、管理者は僕たちを別々の家族に送り、母は二度と僕たちを見つけれなかっただろう。それでも僕は施設を訪問したいと思っている。ビクターに会って電話番号を聞くためだ。

家はとても快適だ。僕は今ではコレアやイゴールやディマと遊んでいるし、誰からも叩かれない。時には、母に問題を相談し、助言を求めることもある。僕たちはとても仲良く暮らしていて、僕は毎日学校に通っている。僕は体育とルーマニア語の授業が好きだ。ここに来られてうれしい。ラプスナで暮らせて僕は幸せだ。

(3ページから続く)

私たちは、支援の受け手としてではなく、変革の推進者として、誰もが受け入れられる平等な社会を構築するための中心的存在なのである。障がいのある子ほど、障がいのある子どもたちのニーズをより深く理解し、対応をより的確に評価できる人はいない。

インクルージョンと公平性を促進する取り組みでは、障がいのある子どもたちは家族、障がい者団体、父母会、そしてコミュニティの様々なグループの支援を得られるようにしなければならない。同時に、遠い所にある支援団体にも頼れるようにすべきである。各国政府は、「障害者の権利に関する条約」や「子どもの権利条約」、あるいは障がいのある子どもたちの問題を扱ったり、これに影響を与える国際条約に規定されている事柄あるいは精神に、政策やプログラムを合致させることで力を貸すことができるはずである。国際的なパートナーたちは条約に沿った支援を提供することができ、民間部門の企業などは、雇用面で多様性を推進することにより、インクルージョンを促進すると同時に有能な人材を集めることができるはずだ。

統計調査を行っている団体は、データ収集と分析の向上に努めている。こうした取り組みは理解の欠如と、これに起因しがちな差別を克服するのに役立つものと思われる。さらにデータは支援の対象を絞り込むことができ、効果を測定する上でも役立つため、データ収集と分析を向上させれば、資源配分とサービス配分を最適に保つことができる。ただし、意思決定者たちは、より適切なデータが出てくるのを待ってからインクルーシブなインフラとサービスの構築に着手する必要はない。待つ必要はないのである。すでに一部の調査で明らかのように、インクルージョンは地域社会全体に関わり、恩恵をもたらす。その要素は新規プロジェクト全体に応用することができるのである。必要なことは、新しいデータが明らかになったときに適用できるよう、取り組みに柔軟性を持たせることである。

本書の次の章では、排斥とそれを広める要因のほか、インクルージョンの理念上および実務上の原則のいくつ

かを説明する。その後の章は、いずれも同じアプローチを使って障壁および有望な解決策を探り、障がいのある子どもたちの一局面に注目する。第3章では、障がいのある子どもたちが自らの才能を開花させ、充実した人生を送ることができるようにするための、健康、栄養および教育サービスについて考察する。第4章は、搾取または虐待に対する法的な取り組みと保護を徹底する機会と課題について考察する。第5章は人道危機の面からインクルージョンについて検討する。

さまざまなサービスから障がいのある子どもたちが排斥され、それが根付いてしまう要因は、彼らの存在そのものが見えていないことにある。子どもの障がいに関する研究は、特に低中所得国では甚だ不十分である。証拠が十分でないことが、結果として最も弱い立場にある子どもたちのための効果的な政策の策定とサービス提供を妨げている。そこで本書の第6章では研究者が直面している課題と機会、および正確なデータ収集と分析を通じて障がいのある子どもたちの存在が分かるようにする方法について考察する。第7章は、この世界子供白書のまとめとして、各国政府、その国際的なパートナー、市民社会、および民間部門が、障がいのある子どもたちのインクルージョンを通じて公平性を促進できるようにするために、必要かつ実行可能な措置について概説する。



中国にて、養母と一緒に歩く9歳のウェンジュン。
© UNICEF/CHINA/2010/Liu



バングラデシュにて、学園祭に参加する障がいのある子どもたちと障がいのない子どもたち。 © UNICEF/BANA2007-00655/Siddique